

# 連載「巣づくりの住まい」vol. 2

建築学科 准教授 石川恒夫  
上毛 平成21年11月18日（水）

## 巣づくりの住まい

②

石川 恒夫

### 「健康住宅」

「健康」をキーワードとするパウビオロギー（建築生物学）は、第2次大戦後にドイツ語圏で生まれた学問領域です。言葉自体はまだ新しいと言えるのですが、これまではその実体が意識されなかったにすぎないと思うことがよくあります。

古書店のカタログで「健康住宅設計図案集」と題する書物を見つけました。購入したところ、発行は1930年（昭和5年）3月。実は、当時の大阪毎日新聞社が国民の健康増進運動キャンペーンの一環として住宅設計の懸賞募集を行ったものでした。

前書きには「従来の日本住宅は、外観はすこぶる立派でも往々日本特殊

## 風土との調和が大切

の風土、気候に適應しない非衛生的なものが多数ありました。何ら防湿の設備のないただ欧米の建築様式を模倣しただけで、もって文化住宅を誇るような状態でありまし

### 外観重視に疑問も

たと記されています。わたしたちの生活に應じた真の「健康住宅」を提示すべく、設計競技を企画したのです。「良水の供給、汚水の排除、汚物の処理」も重視されており、その背景には、25年（大正14年）8月に東京でコレラが発生したこともあったのでしよう。

### 「本能の力」

審査員を務めた京都帝大の武田五一教授は、

当時の最先端である「イ  
ンターナショナルスタイル」に基づく新建築、また鉄筋コンクリートの建物に対して、「どうも日本の気候や風土にぴったりと来ない」と評しています。確かにコンクリートは、表面温度は低く、透湿性能や吸放湿性能も十分ではありません。製造や運搬に要するエネルギーも膨大です。

近代化とは、鉄やガラスといった工業製品による人工物としての建築が文明の夢を実現してきたことにほかなりません。その事実を認めつつも、生き物の「巣」としての住まいは、その土地から材料を採り、その地域の天候に対抗して、本能の力でつくりあげるものではないのです。

（前橋工科大学大学院准教授）



命をはぐくむ住まいは工業製品だけではつukれない